

D.セルラ「ヴェネツィア毛織物工業の盛衰」
(D.Sella;The Rise and Fall of the
Venetian Woollen Industry)

FUNAYAMA, Eiichi / 船山, 榮一

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

23

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

229

(終了ページ / End Page)

243

(発行年 / Year)

1977-11-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006335>

《紹介》

D・セルラ『ヴェネツィア毛織物工業の盛衰』⁽¹⁾

船 山 栄 一

一

十五世紀末にポルトガルによって開拓された、胡椒貿易におけるケープ・ルートの出現が、それまでヨーロッパとレヴァントを結ぶ東方貿易をほぼ独占していたヴェネツィアに対して深刻な打撃を与えたことは周知のところである。けれども、その打撃は、当初はきわめて大きかったとはいえ、ヴェネツィアを通ずる胡椒貿易が以後、そのまま衰退してしまつたわけではない。インド航路の開始を機に、イペリア半島との貿易へその重点を移していったジェノアとは対照的に、ヴェネツィアの対レヴァント貿易は依然として継続されていた。胡椒取引においても、その不振は十六世紀三〇年代ごろまでは深刻だったようであるが、遅くとも同世紀半ば以降には、ふたたびヴェネツィアを通過する地中海ルート（エジプトおよびシリア経由）が大幅に復活することになった。他方、ケープ・ルートを通ずるポルトガルの胡椒輸入量は、むしろ減少する傾向を示し、一五七五〜九五年間の年平均は、一五〇〇〜七〇年間のそれをか

D・セルラ『ヴェネツィア毛織物工業の盛衰』

なり下まわっていたと推定されている。だから十六世紀後半についてみれば、ポルトガルはヨーロッパ向けの胡椒輸入をとうてい独占しえなかったばかりではない。むしろ、ヴェネツィアのそれがポルトガルを圧倒するほどであったのである。ヴェネツィア胡椒貿易の動向に関するこうしたF・レーン以来の研究成果は、わが国でもすでに摂取されており、新しい通説として定着しているといつてよい。⁽³⁾

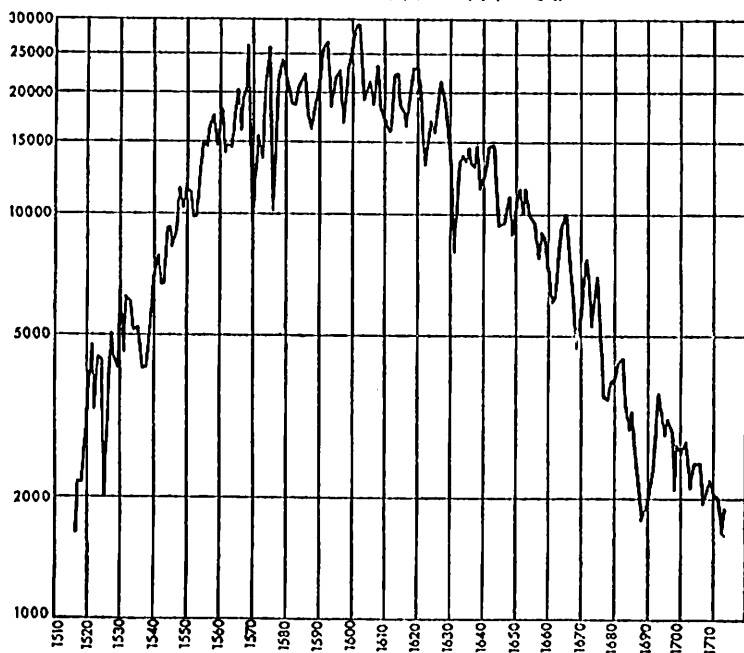
だが、十六世紀におけるヴェネツィア経済の変容には、もう一つの注目すべき局面がみられたのであるが、わが国では必ずしも十分な注意を払われていないように思われる。それは、中世を通じてほとんどに足りぬほどであったこの都市の毛織物工業が、十六世紀に入るとともににわかに勃興し、最盛時には年生産高二五、〇〇〇反にも達しつつ、ヴェネツィアはヨーロッパ有数の毛織物生産地と化した点である。筆者の関心事であるイギリスとの関連でいえば、こうしてヴェネツィアは十六世紀末には、イギリス毛織物のレヴァント進出の前に立ちふさがる強敵となっていたのである。というのも、白地広幅織を主軸とするイギリス毛織物輸出は、十六世紀後半のネーデルラント独立戦争による戦乱の過程と、とりわけアントウェルペンの陥落（一五八五年）を転機に大きな混乱に見舞われ、従来の中欧市場に代る海外市場、なかでもレヴァント地域への進出が企てられていたからである。⁽⁴⁾ところが、当時、このレヴァント市場をおさえていたのが、イタリア諸都市、とくにヴェネツィアの毛織物工業であった。中欧から地中海へと毛織物輸出市場の力点の転換を模索していたイギリスにとって、ヴェネツィアからレヴァント市場を奪取しうるか否かが、当時、イギリスが直面する貿易問題の大きな焦点の一つであった。こうした点はイギリス側の史料も数多く指摘しているところである。そしてその帰趨は、結局のところ、十七世紀を経過する中でヴェネツィア側の全面的敗北に終わった。ヴェネツィアはレヴァント市場を失ったばかりではない。十八世紀初頭までにヴェネツィアでは――ま

たイタリア全体としても——毛織物工業そのものが、ほとんど消滅することになったのである。⁽⁵⁾

伝統的に仲継貿易の拠点であったヴェネツィアで、なぜ改めて毛織物工業の急速な興隆がみられたのであろうか。しかもそれは、十六世紀という時期に高級毛織物に特化した都市〔「ギルド」〕工業として展開されたのである。また、その繁栄がイギリス毛織物の進出に直面して、あわただしく消え去ってしまったのはどういう事情からであろうか。十六・七世紀におけるヴェネツィア毛織物工業は、イギリス農村毛織物工業のいわば対極に位置するものとして、比較史的にみてきわめて興味深い対象であるばかりではない。両者は実際、レヴァント市場をめぐる国際競争という局面で拮抗しあったのであり、こうした事態は国際経済史上の一齣としてかねてから筆者の関心をよびおこすものであった。

ここで紹介するドメニコ・セルラの論考は、そうしたヴェネツィア毛織物工業の盛衰過程とその諸要因を明快に分析したものである。発表年次はやや古いとはいえ、多数の史料の渉猟の上にこの問題を正面から論究したものとしては、現在でも依然として最もすぐれた研究の一つであるといつてよい。十七世紀ヴェネツィアの経済的衰退については、ごく最近、R・T・ラップの包括的な研究も⁽⁶⁾公刊されており、十六・七世紀のイタリア（ないし地中海地域）経済史という、重要でありながらわが国ではまだ十分に耕されていない領域について、専門家による本格的研究を促しているようである。イタリア経済史にうとく、もっぱらイギリス史の側から英・伊間の競争局面に関心を寄せているにすぎぬ筆者は、素材の提供として、さし当りセルラ論文をやや詳細に紹介することに本稿の課題を限定しておきたい。なお、文末に付した注はすべて紹介者によるものであることをお断りしておく。

第1図 毛織物生産高推移（単位：反）



二

セルラ論文は、まず、ヴェネツィア毛織物工業の二世紀間にわたる全般的な動向を概観することから始めている。同工業については、一五一六年から一七一二年にいたるまで連続的に各年ごとの生産高を追跡することが資料的に可能である。これを図示したのが第1図である。これをみると、たとえば一五二五、一五七六、一六三〇年におけるペストの流行、一五七〇～七三年のキプロス戦争、あるいは一六二〇年代や一六八〇年代の動乱、等々の経済的要因による一時的な変動がみられるが、二世紀間を通ずる生産高の長期的趨勢はきわめて明瞭である。大づかみには、ほぼ三つの時期に区分することができる。

(1) 十六世紀初頭から同世紀六〇年代までの上昇期。毛織物の年生産高は約二千反から出発しつ

つ急激な増大がみられ、この間に約一〇倍の生産高を達成している。

(2) 十六世紀六〇年代から十七世紀二〇年代までの停滞期。この時期には一六〇二年の二万八千反余りというピークが含まれている。けれども全体としては、生産高はおおよそ二万〜二万五千反の間を上下しており、一種の頭打ち的な天井に到達したとみなすことができよう。

(3) 最後に一六二〇年代末以降の衰退期。生産高はしだいに減少してゆき、ついに一七一〇年には年生産高は二世紀前の出発点と同じ二千反の水準に復帰する。こうしてヴェネツィア毛織物工業は、二世紀間のうちに、興隆、停滞、衰退の三局面を経過しつつ一つのライフ・サイクルを閉じたといつてよい。

それでは、以上のような三局面を含む長期的趨勢の背景にある諸事情はどういうものであったろうか。

ヴェネツィアにおける毛織物工業の起源は十三世紀にまでさかのぼるといふ。そしてその製品は、イギリスの上質羊毛を原料とする高級染織物（ウールン）であつた。だがその生産高は、中世を通じて年産約三千反以下であり、ヴェネツィア経済にとって何ら大きな意義を担うものではなかつた。たとえば一四二〇年ごろ、ヴェネツィアが輸入する毛織物は四万八千反にものぼり、その多くはレヴァントへ再輸出されている。したがって、ヴェネツィアの取引する毛織物は圧倒的に輸入品からなっており、ヴェネツィアは毛織物取引の中心ではあつても、生産の中心ではなかつたのである。

ところが十六世紀に入ると、ヴェネツィアの毛織物工業はさきにみたように急速な興隆を示し、ヴェネツィア経済を支える主要な柱の一つとまでなつたのである。セルラによれば、その展開の要因は、十六世紀前半の時期を特色づける「例外的事情」にあつた。第一に、リスボンを起点とするケーブ・ルート出現、つまりポルトガルの胡椒貿易

への進出は、ヴェネツィアの胡椒取引に大きな衝撃と不振をもたらした。そのため、ヴェネツィア商業資本は、少なくともその活動の一部を従来の貿易部門から生産部門へと移動せざるをえなかったのである。第二に、十六世紀初頭のイタリア本土でひき続いておきた戦乱は、各地に大きな荒廃をもたらした。その結果、フィレンツェ、ミラノ、パヴィア、コモ、ブレシア等の主要な毛織物工業都市では、生産活動の深刻な沈滞に陥ったのである。たとえば、フィレンツェの状況を報じた一五二九年の一史料はいう——『かつて、ここではたくさんの事業が営まれていた。なかでもこの都市はサン・マリノ織物として知られる高級毛織物を毎年四千反と、その上、スペイン羊毛からつくられるガルビ(algarbi)と呼ばれる毛織物を一万八千〜二万反も生産していた。今日では生産は實際上、中断してしまっている』。また十六世紀のはじめ、毛織物の年生産八千反を数えたブレシアでは、一五四〇年には僅かに一千反を記録するのみであった。一般的には、こうした人口と生産の減少という危機的な状況の中にあつて、ひとりヴェネツィアのみは戦乱をまぬかれ、例外をなしていた。ヴェネツィアは他の諸都市からの避難職人を受入れつつ、イタリア諸都市の毛織物供給力の低下によって生じたいわば真空状態という好機をフルに利用して生産を伸ばしていったのである。

三

では、続く第二期の停滞はどうして生じたのであろうか。一言にしていえば、前の時期にみられた「例外的諸事情」が消失していったからである。まず、さきにふれたように十六世紀中葉以降、胡椒貿易におけるレヴァント・ルートが復活するにつれ、ヴェネツィア資本はふたたび伝統的な貿易活動へと復帰、吸収されていったことが第一。第二に、いっそう重要なことは、一五五九年以後、イタリア本土における戦乱の収束とともに、多くの都市ではしだいに生産

活動も復活し、ヴェネツィア毛織物工業はそれらとの競争に直面するようになったのである。

一五八〇年ごろ、コモの毛織物工業はブームの状態にあると報告され、また一五四〇年に八〇九千反に低下していたベルガモの毛織物年生産高は、一五九六年には二六、五〇〇反にも達した。フィレンツェでは一五五三年に一四、七〇〇反、一五六〇年に二〇、〇〇〇反、一五七二年には三三、三一二反の生産を記録し、その多くはヴェネツィアと同じくレヴァント市場へ送られた。ヴェネツィア共和国のコンスタンチノープル駐在員は、一五七八年につぎのように報告している——『ヴェネツィア・スタイルを真似た毛織物がフィレンツェの人たちによってもたらされ、この都市「コンスタンチノープル」に現われはじめています。それらは色彩の美しい立派な品物だ。……だからフィレンツェの競争のために、われわれ自身の工業がその名声と利益をとくに失うおそれがあり、「当地にいる」わが国の商人たちはいたく憂慮している』。また一五九七年、ヴェネツィアの通商会議 (*Savialla Mercanzia*) はいう——『他国では大量の良質スペイン羊毛から毛織物が製造されている。とくにミラノ公国内のコモやその他の諸都市であるが、ここではわが国「ヴェネツィア」の毛織物の完全な模倣品がますます多く生産されており、しかもその際、貨銀その他の点で大きな利点をそなえている。これらの製品はフェラーラおよびアンコーナ經由でレヴァントへ船積みされ、わが国のものよりも安く売られている』。

こうして十六世紀前半にヴェネツィアの独走を可能にした「真空状態」はもはや消え失せ、ヴェネツィア毛織物工業がいつそう展開されてゆく余地はなくなってしまった。とはいえ、ヴェネツィアは他の諸都市との競争上有利な条件を依然として保持していた。それはまず第一に、製品の品質に関して、ヴェネツィアが従来から高い評価と名声を博していた点である。第二は、ヴェネツィアがもつ対レヴァント通商組織の伝統的な強みであり、それは他の諸都市

の追隨を許さぬものがあつた。こうした事情のもとに、イタリア諸都市の競争に直面しながらも、ヴェネツィア毛織物工業はなおかなりの高い生産水準を維持することができたのであつた。

四

それでは、ヴェネツィア毛織物工業が十七世紀二〇年代末以降、とどめ難く衰退の兆候をあらわにしていったのはなぜであらうか。まず指摘されるのは、そうした事態がイタリア諸都市の競争によつてもたらされたものではないことである。というのは、それらの諸都市でもまた、ヴェネツィアと同じように毛織物工業の著しい沈滞が見出されるからである。たとえばコモでは、十七世紀前半の間に毛織物の年生産高は八千反から僅か百反にまで低下し、ミラノでもまた同じような状態であつた。一五七〇年代には年産三万三千反を数え、ヴェネツィアの強敵であつたフィレンツェでは、一六一六年に一万五千反、一六四〇年には六千反以下という続落を記録している。だからこの時期におけるヴェネツィア毛織物工業の凋落の原因は別の事情に求められなければならない。その主要な要因としてセルラが指摘するのはつぎの三つである。(1)ヴェネツィア・トルコ間の海運サーヴィスの悪化。(2)レヴァント市場における毛織物需要の収縮。(3)新しい競争者たるイギリス・オランダのレヴァント市場への進出。

十六世紀の第三四半期以降、地中海で海運業にたづさわるイギリス・オランダの船がしだいに増加していった。地元の船よりもすぐれていた両国の船は、ヴェネツィアのレヴァント貿易にも雇用され、十六世紀末にはヴェネツィアの営む貿易の大きな部分がこれら北国船によつて行われるほどであつた。ヴェネツィアは自らの海運利害を防衛するため、一六〇二年に対レヴァント貿易における外国船の使用を厳しく制限することを定めた。このいわば「航海条例」

ともいふべきものによつて、ヴェネツィアの輸出商は効率の劣る自国船を用いることを余儀なくされ、レヴァント諸港との通商は大きく阻害されたのである。

他方で十七世紀初頭には、レヴァント市場そのものに由々しい事態が発生した。それはトルコにおける毛織物需要が縮小していたことである。すでに一六一一年にヴェネツィアのトルコ駐在領事はこう書き送っている——『トルコでは国内の動乱によつて人口と富の多くを失つてしまった。そのため今では、その輸入量は以前の三分の一にすぎない』。一六二三—三八年間のトルコ—ペルシャ戦争は、このような事態をさらに悪化させることになった。これまでトルコが輸入している毛織物は、大づかみに二種類に分れており、下層民が用いる粗質の毛織物（カージー織）はイギリスから供給され、上層階級が着用する高級品はイタリアから輸入されていた。下層民の窮乏化にともない、粗質の輸入毛織物はしだいにより安価な地元産の綿交織品に代替されていった。その影響は、十七世紀初頭におけるイギリス産カージー織輸入の激減となつて現われ、カージー織は一六三〇年ごろまでトルコ市場から姿を消すにいたつてゐる。しかしイギリスからはカージー織輸出の減衰を埋め合わせるかのように、今度は染色広幅織が進出してきた。⁽⁸⁾十六世紀九〇年代に数百反のイギリス産広幅織がレヴァント市場に現われて以来、しだいにその数を増し、一六二〇年代までには年平均約六千反となり、一六六〇—一七〇〇年間に於ける年平均は一万二千反から二万反に達している。かつてのカージー織のばあいと違って、イギリスの広幅織はヴェネツィア毛織物と直接に競合關係に立つことになった。しかもレヴァントにおける毛織物の需要は全体として縮小してゐたのであるから、イギリスの進出は、その分だけヴェネツィア側の販路を狭めずにはおかない。ヴェネツィア毛織物と比べれば、イギリス広幅織の品質がいく分劣つてゐることは認められていた。けれどもそれは安価である点で、以前よりも支出を控へざるをえなくなつたレヴァント

の消費者に好評だったのである。セルラが引照するヴェネツィア側の諸史料はいずれも、イギリス製品が『きわめて安く』、ヴェネツィアが太刀打ちできずに敗退していることを異句同音に訴えている。十七世紀七〇年代には、加えてオランダ毛織物もまたトルコに進出してきた。一六七三年のヴェネツィアの一史料は、その脅威的有様を述べていう——『オランダの毛織物がわが国の毛織物にとって代ったことはよく知られている。それは好ましく、軽く、価格も安いのでトルコ人の心をすっかりとらえてしまった。そのためトルコ人はもはやわが国の毛織物を有難がらない。わが国の製品は、買うにも着るにも重いのだ』。

したがって、このように激化した対外競争に対抗してヴェネツィア毛織物工業が生き残るために果さねばならぬ課題は二つあったといえよう。一つは製品コストの引下げであり、他は消費者の好みと流行に即応する新製品の開発である。しかし前掲第一図に示される第三期の趨勢をみれば、ヴェネツィアはそのいずれにも成功しなかったといわねばならない。この点に関するセルラの分析をつぎにみてみよう。

五

外国製品に比較してヴェネツィア毛織物のコスト高を形づくる要因の一つに税負担があった。消費税（*accisa*）と輸出税（原料と完成品に対する）である。輸出市場における自国製品の割高が明らかなるにつれ、こうした税の軽減を求める請願はヴェネツィアの織元と輸出商からくり返し提出された。また、政府当局自らもしばしば、毛織物製造には『過度の税負担が課せられており』『税負担の若干でも軽減されるなら価格は下り、それにつれて売れゆきも増すであらう』ことを認めている。

重税もさることながら、ヴェネツィア毛織物工業にとって決定的な重要性をもつものは工賃問題であつた。⁽¹⁰⁾ まず第一はその水準の高さである。一六三〇年のベスト流行以後、織布工の工賃はそれ以前よりも三分の一も上昇したと報告され（一六三六年）、それからほぼ三十年後の当局の記録も『ベスト流行時に工賃は上り、以後も依然として高く維持されている結果、わが国の商人は大きな被害をこうむっている』（一六六八年）とくり返している。一六七一年、地元の一商人はヴェネツィア毛織物の価格が高すぎることを批難するという——『わが国の織元が職人に支払わねばならぬ工賃は全く過大である。もしそれが引下げられるなら……毛織物はもつと安く売られ、したがって売れゆきはもつと増えるはずだ』。しかしヴェネツィアでは、工賃率が法的に固定されていたため、工賃を競争的水準にまで引下げることは事実上、困難であつた。固定されている工賃表 (*limitazione della mercedi*) を改訂するためには政府の認可を要したが、当局はたとえ改訂の必要を認めたとしても、職人層の不人気をおそれ敢て実施に踏みきろうとはしなかつたからである。それどころか、これは絹織物工業の例であるが、一六九六年、当局は織布工の工賃引上げの要求に応じているばあいすら見出される。引上げの要求自体は当工業の利害にとって不利である、と判断されたにもかかわらずである。こうして一六八九年の一史料が語るところに従えば『職人に一定の工賃率を保証している従来の政策が、わが国の毛織物工業に破滅をもたらした』のである。

工賃水準と並んで、職人の労働能率の悪さも問題とされていた。史料の中では工賃の高さよりも、むしろこの点に批難が集中している観がある。たとえば『職人は一定の工賃を法的に保証されているので、いい仕事をしようという気がほとんどない。というものも、仕事の出来具合にかかわりなく、いずれにせよ工賃が支払われるからだ』（一六八九年）。また、他の史料も同じく訴える——『職人たちは製品の完成にほとんど関心をもたず、自分たちの好きなよう

に働いている』（一六七三年）。ヴェネツィアでは、紡毛工、織布工、染色工等はそれぞれギルドに加入していた。そしてギルドはワークマンシップについては自らの規準を定めており、雇主が職人を自由に選択することや職人の仕事ぶりへ介入することを許さず、織元の望むような労働能率の向上に対する強力な歯止めとなっていたのである。織元は、ギルドの成員である職人たちが仕事の際に織元の指示に従わぬことを指摘しつつ、『職人を雇うばあいに彼らを選択する完全な自由』を与えるよう、しばしば政府に陳情した。しかしたとえば一六九〇年のように『伝統的な慣行を変更することは、目下のところ好ましくない』として却下されている。

このように既得権益を固執するギルドの保守性は新種毛織物開発に際しても障害となったようである。たしかに一連の厳しい技術上の規定が一五八八年以来強制されていた。しかし『イギリス・オランダのスタイルをまねた』毛織物を製造することは、一六七三年に公けに認められるようになった。にもかかわらず、一六七八〜九八年間におけるヴェネツィアの『外国風毛織物』の年産高は、僅かなものにすぎず、数百反を越えることはなかったという。また一六九〇年代のはじめ、ヴェネツィアでオランダ風毛織物の製造を開始すべく十四人の熟練職人を連れてやってきたネーデルラントの織元も、市当局とギルドの敵意にあつて結局は数年後に周辺のトレヴィソ地区へ退去せざるをえなかったのである。

六

これまで検討したような、史料に現われた課税、工賃、ギルド規制に対する批難が、どの程度まで当を得たものであるかを決定するのは容易でない、とセルラはいう。というのもこれらは、とくにギルド規制に関する不満は、しば

しは商人の観点を強く反映しているからである。ただ確実にいえることは、ヴェネツィア毛織物工業が対外競争に押されてきたこと、そしてそのばあい、労働コスト高が決定的意味をもっていたことである。では、労働のコスト高を放置した政府の工賃政策、あるいは労働能率の向上を阻んだギルドの干渉、こうしたものがなかったなら、ヴェネツィア毛織物工業は十七世紀に生き残りえたであろうか。最後にセルラはこう設問しつつ、これに対しては否定的な解釈を与えている。ヴェネツィア毛織物工業の繁栄は、さきに吟味したような「例外的事情」、つまり、たまたま他のイタリア諸都市における毛織物工業が沈滞しており、しかもイギリス・オランダ等の競争はまだ出現していないという事情のもとではじめて存続しうるものであった。したがって、ヴェネツィア毛織物にそうした独占的地位を許していた状況が消失すれば、かりにより賢明な工賃政策やいっそう柔軟な労働契約等々が実現されたとしても、衰退を阻止することは——それを遅らせることはできても——不可能であつたろうというのが彼の判断である。セルラの考えによれば、ヴェネツィア毛織物工業に一貫してつきまとっていた不利な条件は、むしろヴェネツィア市自体の構造に内在していたという。一つは、元来、ヴェネツィア市の立地上の制約によつて、毛織物生産のための充分な広さと水流を欠いていた点である。このため、ヴェネツィア産の毛織物は縮絨のために周辺のトレヴィソ地域へ送られなければならない。もう一つのさらに重要な条件は、労働力供給面での制約である。ヴェネツィアにおける他の諸産業（奢侈品製造や加工貿易工業）の隆盛や貿易港としての諸活動等々の存在は、広範囲にわたる雇用機会を提供しており、加えてヴェネツィアでは生活費も高かった。そうした事情が毛織物工業に従事する職人層に対して強い交渉力と高い工賃を与えることになっていたのである。だから安い労働力が得られる周辺農村地域では、毛織物工業が依然として継続ないしは拡大させているのは決して偶然ではない。また、ヴェネツィアで貿易と港湾活動がめざましく復活

し、絹工業・ガラス工業・製糖業等が繁栄した十七世紀七〇年代以降の時期に、毛織物生産が最も激しく落ちこんだのも偶然ではないのである。明らかにヴェネツィアの資本・企業・労働力は、毛織物生産からふたたびそうした伝統的な諸分野——そこでは有利な立地条件が決定的であり、精妙な手工業的技能が安い労働力の豊富な供給よりもずっと重要な資産をなしていた——へ復帰したのである。

【注】

- (1) Domenico Sella, *The Rise and Fall of the Venetian Woollen Industry*, in: B. Pullan (ed), *Crisis and Change in the Venetian Economy in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, 1968.
- (2) B. Pullan (ed), *op. cit.*, Introduction に見られる研究史の現状に関する適切な概観を参照。
- (3) たとえば、川北稔「ヨーロッパの商業的進出」(岩波講座『世界歴史』第十六巻、一九七〇年)、栗原福也「十六世紀後半の地中海とネーデルラント」(一橋論叢、七二の六(一九七四年))。
- (4) とりあえず拙稿「イギリス毛織物工業と国際競争」(拙著『イギリスにおける経済構成の転換』、一九六七年、所収)、同「イギリス貿易の構造変化」(社会経済史学、三七の二(一九七一年))をみよ。
- (5) C. M. Cipolla, "The Economic Decline of Italy" *Economic History Review*, 2nd S., V (1952).
- (6) R. T. Rapp, *Industry and Economic Decline in Seventeenth-Century Venice*, 1976.
- (7) 原文では "padded cottons"。木綿と何らかの繊維(羊毛か?)の交織ではないかと思われるが、筆者には不詳。
- (8) レヴァント市場に輸出されたイギリスの染色・仕上げ広幅織 (dyed and finished broadcloth) は、当初、サフオク産が主力であるが、イングランド西部諸州で従来の中欧向け白地広幅織生産から染色広幅織への転換が進むにつれて、レヴァント市場へ輸出される西部諸州産の比重がしだいに増加し、すでに十七世紀三〇代にはこれが圧倒的となっていた。
- (9) ここでいわれている「オランダ毛織物」とは、この史料の内容から推して薄手の「新毛織物」(New Draperies)ではないかと考えられるが、この点、オランダ史の専門家の御教示をまちたい。

(10) この時期におけるヴェネツィアの工賃動向については、R. T. Rapp, op. cit., pp. 130ff. 参照。なお、ラップによれば、労働コストがヴェネツィア毛織物の生産コスト中、およそ三分の二を占める。またラップは英伊のポンドとデユカットの交換レートを検討した上で、ヴェネツィアの建築業における工賃がすでに一六二九年までの時点でイギリスのそののほぼ二倍となっていたと試算している。Rapp, op. cit., pp. 127, 134~136. 貨銀の国際比較は推計上むずかしい問題を含むが、ヴェネツィアにおける一六三〇年以降の貨幣貨銀の大幅な上昇をあわせ考えれば、レヴァント市場での競争が激化したこの時期に、英伊間の貨銀較差はかなり大きかったと考えて大過なさそうである。